

石清水八幡宮本『八幡宮寺巡拝記』考

筒井大祐

【抄録】

京都府八幡市男山に鎮座する石清水八幡宮には、古文書や古典籍が数多く伝来しており、それらは石清水八幡宮古文書として、国の重要文化財に登録されている。その古典籍の中に、昭和二十二年の社務所の火災で焼失したとされる『八幡宮寺巡拝記』の現存を確認した。そこで本稿では、その『八幡宮寺巡拝記』の書誌調査と、諸本との比較を行い、石清水八幡宮本が諸本の内、最善本であると結論付けた。

また『八幡宮寺巡拝記』は、『八幡愚童訓』などの八幡縁起と関連するとともに、八幡神（八幡大菩薩）という、神仏の霊験や信仰を主題とした説話集でもあるため、中世文学史における『八幡宮寺巡拝記』の文学史的意義も確認した。

キーワード…『八幡宮寺巡拝記』、『八幡愚童訓』、八幡信仰、八幡縁

起、中世説話集

序

京都府八幡市男山に鎮座する石清水八幡宮が所蔵する古文書や古典

籍は、石清水八幡宮古文書として、国の重要文化財に指定されており、それらの目録である、『続石清水八幡宮史料叢書』全三冊が刊行されている。

本稿では、その内、『続石清水八幡宮史料叢書一 田中家文書目録（一）』（以下、『文書目録』）に著録される、『八幡宮寺巡拝記』（以下、本書）の書誌調査を基に、諸本における位置付けや、中世文学史における意義を明らかにする。

一、書誌と諸本

『文書目録』は、本書を次のように著録する。

桐十一―②② 八幡宮寺巡拝記^{上中下} 一冊

縦二六・八四
横三・八四

（五七枚）

〔^{（奥書）}寛永二年二月廿一日教清（花押）〕

この目録に記載される本書の書誌は、次の通りである。

写本、袋綴一冊。法量は、縦二六・一厘、横二一・〇厘。表紙は墨流し、外題は表紙左肩に「八幡宮寺巡拝記上中下」と打ち付け書き

し、右肩に「桐 十一之箱 四十六卷之内」、右下に「二十二」という付箋を貼る。内題は「八幡宮巡拝記 上 正八幡宮」とある。墨付本文は補修の際に、上部を切り詰められており、また三、四丁目に裏打ちがある。前二紙に当たる遊紙一紙と墨付本文一丁は楮紙で、この本文は、墨付本文二丁目以降の書写本文とは別筆で、後補されたものである。本来の書写本文は二丁目以降であり、これらの料紙は鳥の子である。一紙は十行詰め、墨付本文は全五二丁、後二丁が遊紙である。最末尾の遊紙の表中央に朱筆で

寛永二年二月廿一日 教清

と記す。本書には、書写奥書は記されていないため、書写年次や書写状況は不明である。

次に、『八幡宮寺巡拝記』（以下、『巡拝記』）の諸本を確認する。『国書総目録』⁽²⁾には、以下の四本の所蔵が著録される。

京都大学附属図書館

東京大学史料編纂所

大倉山精神文化研究所

尊経閣文庫

さらに新聞水緒氏は、⁽³⁾の他に東寺観智院所蔵本（以下、観智院本。）を報告された。なお、続群書類従本『八幡愚童訓』乙本には、現存諸本には見えない説話を「巡拝記云」と引用しているが、現在では、逸文しか確認できないため、本稿では諸本に加えない。⁽⁴⁾

さて、『国書総目録』著録の四本の内、京都大学附属図書館所蔵本（以下、京大本。）以外の三本は、石清水八幡宮に所蔵された伝本の転

写本である。この転写本の原本は、かつて近藤喜博氏が古典文庫第三八冊『中世神仏説話』の解説に、次のように記された。⁽⁵⁾

本書は縦八寸八分、横六寸四分の冊子本で、上中下合一冊である。表題には「八幡宮寺巡拝記」とし、巻頭の内題は「八幡宮巡拝記」として後世の筆になり、一紙に九行を収め、一行は二十六字詰を中心とするも不同である。奥に朱筆を以て「寛永二年二月廿一日 教清（花押）」とあるが、本文とは全く別筆で、恐らく所蔵者名と認めたい。一方、本文は古体の仮名を所々に使用している点、更に字体筆勢などを含めた全体的な感じでは、足利初期以降らない古写本と認める事が出来る。

近藤氏は、この解説で石清水八幡宮所蔵の『巡拝記』の書誌を示されたが、この解説の問題は、次の一文である。

因に原本は客年の石清水八幡宮社務所の火災で焼滅しているの
で、今回は大倉山文化研究所影写本によりて校訂した。

近藤氏が指摘される「客年の石清水八幡宮社務所の火災」とは、昭和二十二（一九四七）年の火災を指している。この解説以降、研究史では、古典文庫の原本となった石清水八幡宮所蔵の『巡拝記』は、焼失したものと扱われてきた。

ところが、石清水八幡宮に現存する本書には、奥書に朱筆で「寛永

二年二月廿一日 教清（花押）」とあり、また写本の体裁が、近藤氏が焼失したとされる古典文庫本の原本と一致している。

そこで本書と、焼失したとされる古典文庫の原本が同一であるかを、近藤氏が古典文庫本の校訂本に挙げられた、大倉山文化研究所（現、大倉精神文化研究所附属図書館）所蔵の影写本⁽⁶⁾（以下、大倉本。）を用いて検討したい。

大倉本には、次の書写奥書がある。

右

八幡宮寺巡拝記 上・中・下

京都府綴喜郡八幡町八幡庄石清水八幡宮所蔵

昭和四年五月 寫了

この書写奥書から、大倉本は石清水八幡宮の社務所が火災に遭った昭和二十二年以前の、昭和四（一九二九）年に石清水八幡宮所蔵本（以下、石清水本）を影写した伝本であると確認できる。

大倉本の特徴は、影写に際して、石清水本の本文のみならず、その虫損の形まで写し取っている点や、石清水本の状態を朱筆で記した付箋を貼付する点が挙げられる。その朱筆の付箋は三箇所⁽⁷⁾に貼付されており、各々、次のように記される。

- ・ 次ノ「事ナシ」ノ三字此処ニ入ルベシ原書ニハ此符号アリ
- ・ 原本ニ願字ヲ書シテ磨殺シタル形迹アリテ其俣トナレリ
- ・ 原本ニ文字ヲ磨殺シタル形迹ヲ存ス

この大倉本の付箋の注記は、本書の当該箇所と形状が一致しており、また本書と大倉本は、本文や虫損の形も一致している。

これらの点から、本書は大倉本が影写に用いた原本であり、近藤氏が、すでに火災で焼失したとされた、古典文庫の原本そのものと認められる。

但し、本書は一紙に十行を収めるが、大倉本は一紙に九行しかないため、本書と大倉本は、墨付本文と丁数が異なっている。近藤氏が解説で、「一紙に九行を収め」と記すのは、本書の行数ではなく、大倉本の行数である。

さらに、本書の後補された前二紙の内、墨付本文が大倉本と一致する点から、本書の後補は、大倉本が影写された昭和四年以前であると判断できる。

さて、『巡拝記』を収録する古典文庫が発行されたのは、昭和二十五（一九五〇）年である。昭和二十二年の社務所の火災では、足利義教奉納の石清水八幡宮縁起絵巻や松花堂昭乗筆の八幡大菩薩の絵像などが焼失している⁽⁷⁾。これらの社宝が焼失するという混乱の中で、『巡拝記』も焼失したという誤解が、近藤氏の解説に反映されたのである。ところが、石清水八幡宮での古文書、古典籍の調査の過程で本書は再発見され、『文書目録』に著録されたものの、その現存が明らかとなった後も、詳しく調査される事はなかった。

そこで次に、本書の『巡拝記』諸本における位置付けを改めて検討したい。

二、諸本における本書の位置付け

『国書総目録』著録の『巡拝記』諸本の内、京大本以外の三本は、本書の転写本である。そのため、本書と比較する伝本として、観智院本と京大本を取り上げる。

これらの伝本は、新聞氏により各々、取り上げて論考されているので、それを基に、三書の関係を再検討する。なお、新聞氏は古典文庫所収本を、奥書の所蔵者名から、教清本と呼称される。

先ず、観智院本の書写奥書は、次の通りである。

一校畢

本奥書云

于時广广三^{庚辰}五十^{壬戌}申^戊剋於左女牛亭筆功終宗便^{春秋六旬}

於同所同十七日^{己巳}已初一校了天陰

上下帖悉任證本令書写之間不審千万然者後見仁

被直之者併可資大菩薩法樂者也必々

延文三年^{戊戌}四月廿一日於梅津令書写訖

観智院本は、その書写奥書から、本奥書にある暦応三（一二四〇）年に「左女牛亭」で書写された伝本を、延文三（一二三八）年に「梅津」で書写した伝本であると判断できる。

新聞氏は、この奥書について、

文中「於左女牛亭」とあるが、左女牛には六条左女牛八幡宮（若宮八幡宮・天喜元年源頼義創建）があったことから、この本奥書を書いた人物は、同八幡宮と何らかの関係を有する者ではないかと思われる。

また、奥書中「梅津」は、東寺領山城国桂上野庄と隣接し、『東寺百合文書』によれば、梅津にも東寺の散在名主が存在していたことが知られるので、東寺関係者の居住もしくは往来があったと思われる。奥書を書いた人物は、梅津に関係の深い東寺関係者と推定され、その人物が本書を観智院に伝えたのではないだろうか。

と、観智院本は、東寺観智院金剛藏聖教文書という点から、その書写者も東寺関係者と推定される。

さらに、観智院本の内容を、次のように指摘される。

奥書中に「上下帖悉任證本令書写」云々とあり、上下二巻に分かれていた本であることが知られるが、現在のところ下巻しかその存在が確認されていない。本文は京大本や教清本とあまり異同はないが、所々両本より詳しい記述がある。・・・また両本に共通して見られる注記や錯簡はない。以上の点から、観智院本は、現存諸本の中では『巡拝記』祖本に最も近い伝本であると考えられる。またこの本は、京大本や教清本には存在していない説話を一話記載しており、この両本とは明らかに別系統である。

新聞氏は、観智院本を「現存諸本の中では、『巡拝記』祖本に最も近い伝本である」として、『巡拝記』の古態を留める伝本であると指摘されたが、本書や京大本とは別系統の伝本とされた。

次に、京大本の奥書を示す。

右此記録者冷泉院雖為勅筆 治承四年焼失

畢多愁歎処俗別当紀則吉集旧記奉注之者也

明応次季^{乙卯}三月十九日

于時寛文六^{丙午}六月三日

右此一巻者松本坊椀本坊以両本令

書写畢

祐筆秋山小七良

于時宝永三^{丙戌}仲呂十五日

惠乗之

右以本書写校合訖

助筆性善

于時正徳四年^{甲午}五月日 雄徳山太西坊寛運

新聞氏は、京大本の奥書から「石清水八幡宮の宿院に伝えられたもの」と指摘され、その成立状況を詳述されるが、本稿では、京大本は明応四（一四九五）年の本奥書を有する、正徳四（一七一四）年の書写本であり、石清水八幡宮の宿院に伝来した点のみを確認するに留める。

新聞氏は、さらに本書と京大本に共通する注記を挙げられた上で、

教清本と京大本は右の様に一致する注記がある反面、本文に細め

な異同があり、また漢字と片仮名の書き分けにおいて、一致しない箇所がかなり見うけられる。このことから、この二本は別々に

伝写されてきた本であると言うことができるが、同時に次にあげる三点から考えて、もとは同一の原本から出たものであり、おそらくその段階の『巡拝記』に、この二本に共通している注記と錯簡があつたのではないかと思われる。三点とはすなわち

(1) 京大本の増補部分を除いた所収説話が両本で一致すること。

(2) 互いに共通する注記があること。

(3) 錯簡とおぼしき箇所も一致すること——教清本下巻45話（京大本下巻第33話）末尾が、下巻第56話（同第58話）に混入している。

と、両書は所収説話をはじめ、注記や錯簡などが一致するとされながらも、

教清本と京大本は字句や注記の場所が異なるなどの相違点があることから、この『巡拝記』と教清本は同系統の本ではあっても直接的な兄弟関係ではなく、やや離れた親戚関係にあると言ふべきであろう。

と、本書と京大本の相違点から、両書の関係を「やや離れた親戚関係」と位置付けられた。

以上の指摘を基に、本書と京大本の関係を改めて検討する。

なお、本文の検討にあたり、近藤氏が古典文庫所収の際に、仮に付けられた説話番号と説話表題を用いた上で、本書の該当する本文の丁数と行数を括弧で示す。

さて、新聞氏が言及されていない、本書と京大本の違いとして、本書の本文には、語句が挿入記号を用いて細字で追筆している点が挙げられる。この追筆部は、古典文庫の翻刻本文では、他の本文と区別されていない。

本書の挿入記号による細字追筆部をいくつか挙げると、例えば第三話「香椎宮の事」では、

仲哀ノ御宇九年ノ春二月御カハネヲハ武内ノ宿禰海路ヨリ長門国
豊浦ノ宮ヘオクル（5丁表8行目）

の本文の「二月」と「御カハネ」の間に挿入記号を用いて、

天皇崩シ給キ或云親アタリ異国ノ矢ニ当テ崩ジ給フ竊ニ御戸ヲ武
内ノ

の語句を細字で追筆する。この挿入により、原文の「御カハネヲハ武内ノ」が、追筆部と重複したため、「御カハネ」の語句を見せ消ちとする。京大本では、この追筆部分が本文に取り込まれ、次のようになっている。

仲哀ノ御宇九年ノ春二月ニ天皇崩シタマヒキ或云親リ異国ノ矢ニ
アタツテ崩シタマフト云竊ニ御戸ヲ武内宿禰海路ヨリ長門豊浦ノ
宮ニ送ル

第三一話「別当宗胤頌文の事 附八幡大菩薩の心」では、

鏡ニ善悪ノ形ヲ現カ如クニ非ス只三学ノ力ヲ神剣トシテ利生ノ幡
ヲ照スト也（27丁裏1行目）

の本文の「如クニ非ス」と「只三学ノ力」の間に、

又莫野力剣ノ敵ヲ取り漢王ノ諸侯ヲ伏セシ剣ニモ非ス
の語句を挿入記号で追筆し、さらに「神剣トシテ」と「利生ノ幡ヲ照スト也」の間にも、次の

異国ノ敵ヲフセキ八正道ヲ靈鏡トシテ

という語句を、同じく挿入記号で追筆する。

この本文は、京大本では次のようにある。

鏡ハ善悪ノ形ヲ現スルカ如ニモアラス又鑊耶力剣ノ敵ヲ取り漢王
ノ諸侯ヲ伏セシ剣ニモアラス只三学ノ力ヲ神剣トシテ異国ノ敵ヲ
フセキ八正道ヲ靈鏡トシテ利生ノ幡ヲ照ス也

また、第四五話「念仏百万遍奉持の女房の事」でも、本書は、

其ノヤウニ念仏ノ数ハオホヘストモ唱ヘ居タルナラハ往生スヘシ
(42丁表6行目)

の「居タルナラハ」と「往生スヘシ」の間に、挿入記号を用いて、

大菩薩ノ御心ニ一返モ不洩留メ御坐ヘシ故只念仏ヲ申也数ヲハ是
ニ恥ソト御示現

という語句を追筆する。

この追筆部も、京大本では本文に取り込まれており、

其様ニ念仏ノ数ハ不覺トモ唱エ居タルナラハ往生スヘシ大菩薩ノ
御心ニ一返モ不洩ト、メマシマスヘシ故二只念仏ヲ申セ数ヲハ是
ニトルソト御示現有リ

とある。但し、京大本では本書の追筆部を「往生スヘシ」の後に記しており、本書と本文が異なっている。

以上のように、両書の本文を比較すると、本書の挿入記号を用いた細字は、同じ石清水八幡宮内に伝来した京大本に拠り、追筆された可能性も考えられる。そこで、次に本書の異本注記を検討する。

新聞氏は、本書と京大本の両書に、共通の注記がある点を指摘され

たが、この両書には、共通しない異本注記も見られる。

例えば、第七話「宇佐宮の事」の本書の本文は、

豊前国宇佐郡蓮台寺山イ本ノフモト(9丁表10行目)

と、「蓮台寺」に「山イ本」の異本注記がある。この本文は、京大本には「蓮台山」とあり、本書の異本注記が京大本の本文と一致している。一方、第五二話「中納言成範作善の事」では、本書には、

遙御照見アリテ御影向アリケリト云々(48丁表3行目)

とあるが、京大本では、

遙ニ御照覧見イアリテ御影向有ケリト云云

と「御照覧」に「見イ」の異本注記があり、本書の本文と一致する。

このように、両書では互いの本文と一致する異本注記もある一方、本書にしか見えない異本注記もある。

第一一話「大宰大貳有国神詠を賜る事」には、

ワタツ海々ノ面モシツカニテ有リ国ヤスキ物トシラスヤ身トッ成スルイ本(14丁表4行目)

と、「物トシラスヤ」に「身トソ成ヌルイ本」との異本注記があるが、京大本には、本書のような異本注記は示さない。

第一二話「石清水八幡宮の事」でも、本書には、

貞觀五季正月廿一日^{十一日イ本}（15丁表3行目）

と、「廿一日」に、「十一日イ本」の異本注記があるが、ここでも京大本は、異本注記を示さない。

それに対して、京大本のみに見られる異本注記もある。

第三〇話「八幡大菩薩阿弥陀の心を示現の事」の本書の冒頭には、

或異人ノ御示現云（25丁表4行目）

とあるが、京大本では、

或異人^{貴人}ノ御示現二曰

とあり、「異人」に「貴イ」という京大本のみの異本注記を示す。

この本文は観智院本では、

或貴人ノ御示現云

とあり、京大本の異本注記と一致している。

この点から、京大本の異本注記は、観智院本に拠っているとも考えられるが、本書にも、例えば、第二九話「神子牛に化生の事」に、

仏爰^{教イ本}二ノソムルニ（24丁裏6行目）

と「爰二」に「教イ本」の異本注記があり、これは観智院本の、

仏教二ノソムルニ

と一致している。

この他に、本書と京大本を比較すると、第三一話「別当宗胤頌文の事 附八幡大菩薩の心」では、本書の「莫野」「諸侯」が、京大本では「鏤耶」「諸候」とあり、その用字が異なり、第四五話「念仏百万 辺奉持の女房の事」でも、本書の追筆部が、京大本の本文とは異なる。

このように本書と京大本では、異本注記を付す語句や用字が異なり、なおかつ、観智院本を加えた三書の比較でも、各々、その本文に異同もあるため、これら三書に直接の書承関係は認められない。

但し、新聞氏が指摘されたように、本書と京大本には、所収説話や注記が共通する点から、なんらかの影響関係が想定できる。

その例として、第四〇話「仲蓮房死骸を処理する事」（38丁表10行目）を取り上げる。

新聞氏は、本説話を次のように指摘される。

『巡拝記』の説話には、筆者の見聞にもとづくものもあることが、観智院本にのみ存在する本文で明らかになる例がある。

此コト人ノ語りシヲ略シテ記スル也委キ事ハ彼ノ僧ノ事ヲ記セリ尋ネテ見ルヘシ（観下²⁴）

観智院本下²⁴（古典文庫本下40）は、同話が『八幡愚童訓』乙本「不浄事」にも見える。仲蓮房という僧が石清水に参る途中、泣いていた若い女のために母親の屍を捨ててやったという内容である・・・観智院本の本文から、仲蓮房のことを記した記録のあったことが知られるが、あるいは『愚童訓』の方はこの記録によったのではないだろうか。『巡拝記』の方はこれとは別に作者の伝聞を書き留めたものであり、この辺に両者の視点が異なる原因があるように思われる。

新聞氏は、本説話を「作者の伝聞を書き留めたもの」と推定されるが、観智院のみに見られる記述から、観智院本の本文が、本説話の本来の記述であると認められる。

そこで、本説話を三書で比較すると、京大本の本説話の末尾には、

此僧衆一衣ヲノソム事モナク

という本文がある。この「衆一衣」という語句の意味は取り難いが、古典文庫でも、「衆一エ」と翻刻される。ところが、観智院本の当該箇所を見ると、

此僧衣ヒトエヲ望ムコトナシ

と、その本文は、京大本の「衆一衣」とは異なり、「衣ヒトエ」であり、観智院本の本文では、僧侶が布施に、「衣ヒトエ」も望まなかったと意味が取れる。この観智院と京大本の異同の原因として、「衣」と「衆」の字形の類似が考えられる。

本書で当該箇所を確認すると、「衣」の字形が崩れて、「衆」とも読める字形である。このため、古典文庫の翻刻でも、本書の「衣」を「衆」と読み誤り、「衆一エ」としているが、本来は、観智院本の「衣ヒトエ」が正しい本文であり、本書の翻刻本文も、正しくは「衣一エ」とすべきである。このように、京大本の「衆一衣」は、本書の字形の崩れによる「衣」と「衆」の書き誤りを承けたものと認められる。また、本書と京大本には、所収説話を始め、注記や錯簡なども共通している。

これらの点から、京大本は、本書の本文を承けて成立した伝本であり、そのため本書の書写年代は、京大本の本奥書の明応四（一四九五）年以前と判断できる。

以上、『巡拝記』の伝本を取り上げて、各々の本文を比較した。

『巡拝記』諸本の内、観智院本は最も祖本に近い、古態を留める本文を有するが、下巻のみの伝本であり、所収説話も全三十話である。また京大本は、本書の本文を承けた伝本である。

それに対して、本書は京大本よりも正しい本文を有しており、なおかつ、観智院本よりも多い、全五七話の説話を所収するため、『巡拝

『記』の伝本において、最善本である。

また、本書は、上中下を一冊に書写した伝本であり、本書の原本は、上中下の三巻本と推定できるが、観智院本は、書写奥書に「上下帖」とあるため、その原本は、二冊本であると考えられる。この点から、本書と観智院本は別系統の伝本に拠っており、今後の『巡拝記』研究において、その成立や展開を考察する上でも、観智院本に對置する伝本として、本書が有する意義は大きい。

三、『八幡宮寺巡拝記』の文学史的意義

最後に、『巡拝記』の文学史的意義を確認したい。

文学史における『巡拝記』の先駆的研究は、新聞進一氏の今様研究である。⁽¹¹⁾新聞氏は、後白河法皇の今様と関わり、『愚童訓』乙本に所収される説話を検討されたが、そこに見える「巡拝記云」が『八幡宮寺巡拝記』を指す事を明らかにされた。その上で、『巡拝記』の中に、『梁塵秘抄』に所収される今様が見える点を挙げられ、

時代的に云へば「秘抄」の方が「愚童訓」「巡拝記」よりも先でなければならぬが、後者の方があながち転訛したともいへない古調を存してゐる。

と、『梁塵秘抄』と『巡拝記』を比較されて、『巡拝記』に所収される今様に古態を認められた。このように文学研究において、『巡拝記』に言及されたのは、新聞氏の論考が嚆矢であるが、この『巡拝記』研

究に画期をなしたのが、近藤喜博氏により、古典文庫第三八冊『中世神仏説話』⁽¹²⁾に、その翻刻本文が収録された事である。近藤氏は、その収録にあたり、解説に次のような研究の方向性を示された。

これらに含まる、説話に関しては、日本靈異記・八幡愚童訓或は神道集の説話と比較すべき資料を示す・・・及んで八幡愚童訓は、本書と同じ材料より取れると思はるゝ点が多いので、その方面の研究も要する・・・

近藤氏は、『巡拝記』所収説話と「比較すべき資料」に、『日本靈異記』や『八幡愚童訓』、『神道集』を挙げられた上で、『八幡愚童訓』との共通説話を課題とされた。⁽¹³⁾また、成立年代を、

本書の著作年代は明白でないが、本文中に引かれる年号に求める、下巻の第四十話に、「弘長の春比、京ヨリ一人ノ天台宗ノ僧云々」とあるが、眼に留る・・・更に問題は文永弘安の役にたのまれた八幡の靈威について全く筆にせず、して見れば、弘長年間以後、文永八年の蒙古襲来以前の四五五年間に成立した、とすることが妥当な成立年代とされよう。

と、その内容から「弘長年間以後、文永八年の蒙古襲来以前の四五五年間」と推定されたが、これは現在でも、『巡拝記』の成立年代の指標である。

さらに、新城敏男氏⁽¹⁴⁾は、

『巡拝記』そのものは完成されたものではないがより重要なのは、弘長年間から文永五年に至る時期にこうした八幡の靈験譚を中心とする説話集が撰述されたことである。さらにその集成された説話・縁起のほとんどが、後の『愚童訓』の資料とされたと思われるところに『巡拝記』の持つ意義の一つがある。

と、『愚童訓』の依拠資料として、『巡拝記』の意義を指摘された。

新聞水緒氏⁽¹⁵⁾は、古代から中世までの説話集に語られる八幡説話を概観され、

古代から中世までの八幡説話の変容のあらましを見てきたが、このような流れの最後尾に位置するのが『八幡宮巡拝記』である。

と、『巡拝記』を八幡説話の変容の最後尾に位置付けられた。

このように『巡拝記』所収説話は、これまで八幡縁起や八幡説話との共通説話の指摘が研究の主眼であった。しかし、『巡拝記』所収説話の文学史的意義は、他の中世文学との関連にも認められる。

例えば、近藤氏は、能恵法師絵詞の制作年代を推定する資料に、第一七話「能恵得業の事」を取り上げられ⁽¹⁶⁾、

能恵得業絵巻の制作年代を求めるに関連し、その裏付をするに役

立つ一片であるであろう。

と、その説話を能恵法師絵詞の成立を考察する傍証とされた。

佐竹昭広氏⁽¹⁷⁾は、第二四話「橘奇瑞の事」を挙げられ、その内容を分析され、

一種の「福渡し」説話とでも称すべきこの話に、二つの重要な問題が含まれている・・・第一は、この八幡大菩薩が、二人の信者に対して、決して平等ではなかったということ、第二は、ことばというものが、ここでは、実際の事物と同等、もしくはそれ以上の力を發揮している

と、その特徴を指摘された上で、本説話を端緒に、中世の思想を読み取ろうとされた⁽¹⁸⁾。

『延慶本平家物語全注釈第一本（巻二）』⁽¹⁹⁾は、桜本中納言の注解に、第五二話「中納言成範作善の事」を挙げ、

『八幡宮寺巡拝記』下には、河内から来た僧が「法勝寺ノ東、禅林寺ノ辺ニ桜本ト云フ所」を訪ねて行った所、「中納言成範ト云人」が法華経を写していたとの記事がある。「桜の下」の意は付会で、本来は地名だったものか

と記しており、『平家物語』の同時代資料としても留意される。なお、

マイケル・ジャメンツ氏は、本説話を取り上げられ、

『転法輪鈔』や『澄憲作文集』にも見える澄憲作『参議左兵衛督成範卿御八講結願表白』は、成範と後白河院の關係や深い信仰心が窺え、それは『八幡宮寺巡拝記』にある「中納言成範作善の事」の逸話の元になったであろう。

と、本説話の原拠を唱導書に見出された。

また佐々木紀一氏は、『王年代記』と、『平家打聞』、『神道集』に所収される「宇佐八幡縁起」が『巡拝記』と近似する事を指摘された。

さらに、『巡拝記』自体の成立も今後、究明しなければならないが、その成立を解明する資料の一つに、金沢文庫所蔵劔阿手拭本『八幡略縁起』⁽²²⁾を挙げたい。この『八幡略縁起』は、津田徹英氏により、次のように解説される。

本書はその書名や目録に収められた項目からわかるように八幡神關係の縁起・説話・託宣等を『政治要略』『類聚国史』『東大寺八幡験記』などといった先行する書物から抄出したものである。この目録に収められた項目にもとづくと三十二の略縁起からなり、現存する冊子の表紙の記載からこれらを七帖に分けて収めていたと考えられる（ただし、七帖のうちに『目録』一帖分を含めて数えていたかどうかは不明）。なお、金沢文庫に現存するのは『目録』および『第四』（その内容は第七「宮崎宮記」からはじまる）

以降で、うち『第五』と『第七』は断簡に過ぎないが、中世において八幡神に関するどのような縁起・説話類が受容されていたかを窺い得る資料としてその存在は貴重といえよう。

『八幡略縁起』は零本で、その全容は不明であるが、その目録に『巡拝記』所収説話と共通する説話表題が見える点や、「第七 卅一 兵衛尉義経事」の本文が、第五〇話「山本兵衛尉吉恒利生により流罪召還事」と同話である点、東国における八幡縁起の受容という点からも、『巡拝記』を考察する上で重要である。

今後の『巡拝記』研究は、八幡縁起の成立や八幡説話の展開の基礎資料に留まらず、その所収説話の中世文学史における意義の考察も課題である。その上で、中世における八幡神（八幡大菩薩）への信仰の様相を語る、神仏説話集の側面も再評価されなければならない。

注

- (1) 『続石清水八幡宮史料叢書（石清水八幡宮文書目録1）』（石清水八幡宮、一九八五年）。
- (2) 『補訂版 国書総目録 第六卷』（岩波書店、一九九〇年）。
- (3) 新聞水緒「神仏説話と説話集の研究」（清文堂出版、二〇〇八年）。
- (4) 前掲註（3）では、諸本に「続群書類従所収『八幡愚童訓』（乙本所引本）」を挙げる。
- (5) 近藤喜博編『中世神仏説話』（古典文庫、一九五〇年）。
- (6) 大倉精神文化研究所附属図書館所蔵影写本の複写に拠る。
- (7) 文化庁編『戦災等による焼失文化財（増訂版）美術工芸篇』（臨川書店、一九八三年）。
- (8) 京都府立京都学・歴史館所蔵東寺観智院金剛藏聖教文書マイクロフ

イルムからの複写に拠る。複写に際し、東寺宝物館の許可を得た。

- (9) 『八幡宮巡拝記 京都大学蔵』（京都大学国語国文学資料叢書二二三）（臨川書店、一九八〇年）に拠る。

- (10) 前掲註（3）。

- (11) 新聞進一『歌謡史の研究 その一 今様考』（至文堂、一九四七年）。『巡拝記』と『梁塵秘抄』に関する他の論考に、関口静雄「本体観世音考」（『宇部国文研究』第十三号、一九八二年三月）、「聖母御歌考」（『日本歌謡研究』第二二号、一九八三年九月）、松村嘉幸「『八幡宮寺巡拝記』に見える歌謡」（『奈良教育大学国文・研究と教育』第八号、一九八五年三月）、「八幡宮寺巡拝記」に見える歌謡」（『日本歌謡研究』第二六号、一九八七年二月）等がある。

- (12) 前掲註（5）。

- (13) 『巡拝記』と『愚童訓』の共通説話に関しては、日本思想大系『寺社縁起』所収「八幡愚童訓」乙本・頭注、新城敏男「中世八幡信仰の一考察―『八幡愚童訓』の成立と性格―」（中野幡能編『民衆宗教史叢書 第二巻 八幡信仰』、一九八五年）、新聞水緒氏前掲註（3）等の論考がある。

- (14) 新城氏前掲註（13）。

- (15) 前掲註（3）。

- (16) 近藤喜博「絵巻物詞書研究の新史料」（『国華』六九九号、一九五〇年六月）。この他、『巡拝記』と『能恵法師絵詞』に関する論考に、同氏「絵巻に関する資料覚書―能恵法師伝と春日権現験記抄―」（『美術史』第二五号、一九五七年三月）、竹居明男「能恵法師絵巻」とその周辺―中世八幡宮をめぐる蘇生譚覚書―」（『國學院雑誌』第八八巻第六号、一九八七年六月）がある。

- (17) 佐竹昭広『民話の思想』（平凡社、一九七三年）。

- (18) 北川忠彦・田口和夫・関屋俊彦・橋本朝生・永井猛・稲田秀雄校注『天理本狂言六義（下巻）』（三弥井書店、一九九五年）は、「三十三鞍馬参」の「ふくわたし」の語注に、本話を挙げる。他に、本位田重美『評註建礼門院右京大夫集全釈（改訂版）』（武蔵野書院、一九七四

年）、稲垣泰一「橘と柑子の話」（新編日本古典文学全集『今昔物語集 ③』、小学館、二〇〇一年）、稲田利徳「三つなりの橘」考」（『国語国文』第七五巻第八号、二〇〇六年八月）が、本話を基に、「橘」の意義に言及する。

- (19) 延慶本注釈の会『延慶本平家物語全注釈第一本（巻二）』（汲古書院、二〇〇五年）。

- (20) マイケル・ジャメント『勝賢表白集』の解説―「桜町中納言」藤原成範の妻子を手がかりに『平家物語』生成の一考察―」（国立歴史民俗博物館＋松尾恒一編『東アジアの宗教文化―越境と変容―』、岩田書院、二〇一四年）。

- (21) 佐々木紀一「『王年代記』と『平家打聞』・妙本寺本『曾我物語』・『平家族伝抄』との関係について（上）、（下）」（『国語国文』第七二巻第十号、第七二巻第十一号、二〇〇三年一〇月、一一月）。

- (22) 神奈川県立金沢文庫『金沢文庫の中世神道資料』（神奈川県立金沢文庫、一九九六年）に、解説と全冊の翻刻が収録される。また、高橋秀榮「平将門の調伏祈禱僧」（真鍋俊照『密教美術と歴史文化』、法蔵館、二〇一一年）は、平将門説話に関連して、「八幡略縁起」と『巡拝記』第一九話「平将門討る、事」に言及する。

付記

貴重な資料の閲覧、複写を御許可下さった石清水八幡宮、並びに、大倉精神文化研究所附属図書館、東寺宝物館、京都府立京都学・歴史館に對し、心よりお礼申し上げます。

本書の書誌に関しては、石清水八幡宮での調査、撮影に同行した黒田彰氏の教示を得た。

本書の翻刻を、『佛教大学大学院紀要』第46号（二〇一八年三月）、第47号（二〇一九年三月）に掲載予定である。

（つつい だいすけ 佛教大学総合研究所特別研究員）